

# 美術史料による江戸前期湯島聖堂の研究、一束

研究代表者 守屋正彦

## 一、研究に至った経緯

本研究の端緒となったのは湯島聖堂から引き継がれた『歴聖大儒像』六幅が筑波大学附属図書館に所蔵され、それと関連する資料として、もとは湯島聖堂の大成殿内を飾った扁額と思われる後世の模本『賢聖障子図』一四面がメクリの画稿として伝来したことによる。「賢聖障子図」は古くは平安期にさかのぼる画題で、さらに飛鳥時代へとさかのぼって、儒仏道の信仰が仏教の受容とともにわが国に入っている。この古典的画題を筑波大学の模本に名称として当てることは適切ではなく、実際『賢聖障子図』に描かれた肖像と一四面中の歴代儒者の肖像は内容が相違し、附属図書館に所蔵された折に適切な画題がなかったものか、美術史的な分類を顧慮せず、便宜的に「賢聖障子図」の名称をあて、筑波大学の所蔵にきしたものと考える。しかし本来は孔子から朱子に至る歴代の儒者を一四面に分けて網羅した賢儒肖像とみなすことができる。

本図は当初は一四面ではなく、筑波大学附属図書館の目録には一六面あつ

たことが記録され、それが罹災し、二面が失われた経緯がある。紙背には「東京高等師範学校」印が捺され、『昌平志』に記録される扁額一六面と員数とも一致するものと想定され、本図が模本として、大成殿内にあつた扁額をいつのころか記録とした粉本であることが想定されたのであつた。

これを研究仮説とした場合には、『賢聖障子図』と呼称される模本と考えられる画稿一四面が、一体何時ごろの扁額の記録化であるのかが問題となろう。『聖堂略志』の図面から判断するに、江戸前期に湯島聖堂が現在地に開かれた折、当初の礼拝空間を荘厳するため、大成殿内に入り、両脇の壁面から、孔子像を祀る正面に至る。その両翼壁面に、左右各八面の扁額が掛けられたことが知られる(1)。扁額は最初、狩野益信が一六八八年(元禄元年)に描いたが、一七〇三年(元禄一六年)に焼失。翌一七〇四年(宝永元年)にこれを補うべく狩野常信が担当したことが記録されている(2)。

それ以後に扁額が制作された記録はなく、おそらく筑波大学所蔵の一四面はこの両者いずれかの写しと考えられるが、模本の描かれたと考えられる時代性は、どう考慮しても幕末あたりまで下るものと想定される。そのため、焼失した益信による当初の扁額を写したというよりは常信の模本とすること

が可能性としては濃厚であり、これを仮説として大成殿内部の復元研究を進める糸口を見出したのであった。

では本研究が対象とする江戸前期に開かれた大成殿の内部空間はどのようなものであつたのであろうか。それには行われる儀式に關しても考察する必要があるが、釈奠の儀式に用いられた筑波大学所蔵の狩野山雪筆《歴聖大儒像》はあまりに状態が良く、常設して掛けられていたわけではないことは、その良好な彩色や痛みのない画面から一見して明らかと認められる。おそらくは常設空間としては正面正殿に孔子像ならびに四配（顔子、曾子、孟子、子思）を安置し、そして壁面に扁額一六面が設置されたとみなすことができ。立体像である孔子像等五体ならびに扁額は移動にふさわしい重量とは考えがたく、大成殿での儀式がない折にも常設されていたと考えて間違いないであろう。従つて釈奠の折、そのような祭典の時期だけ、短期間のみ宋儒六人の肖像画、言い換えるならば《歴聖大儒像》六幅を正面左右に各三幅ずつ掛けた(3)と、先の画像の状態から推論できる。このような礼拝空間の復元、これを仮説として、本研究の端緒としたのである。

## 二、研究の目的と方法

筑波大学附属図書館に所蔵された模本である《賢聖障子図》一四面と『昌平志』に先賢先儒八九人を描いた扁額一六面、扁額はそれを《賢儒像扁》と文中表記がおこなわれている。両者が結びつくものであるかは、一つに、その描かれている肖像表現の一致を見出し、次に筑波大学と湯島聖堂を結びつける根拠を示す必要がある。

このことに關し、手始めの研究を進めるにあたっては、肖像表現は筑波大

学の模本が狩野常信筆原本の写しとして可能性があるかということになる。模本は紙背に「松谷天來粉本之印」とあり、早書きによる墨線が描かれたもので、画中には衣服の色を指示する簡単なメモも薄く書かれている。模本は簡略な筆致でありながら、その表現から常信筆を模した可能性が濃厚にうかがえるもので、現存する常信の著した賢儒肖像を实地に確認し模本の可能性を傍証できうると考える。

つぎに筑波大学との關係については一八七二年（明治五年）にさかのぼることになるが、筑波大学の前身校の最初は師範学校である。同校は湯島聖堂ならびに昌平坂学問所の遺構を利用したもので、当時、わが国最初の博物館や図書館の最初にあたる書籍館も併置されていた。その後翌一八七三年に東京師範学校、一八八六年（明治十九年）に高等師範学校と改称し、一九〇二年（明治三五年）に東京高等師範学校と改称し、文京区大塚に移転している。そしてこれに絡んで重要なことは近代になって行われなくなった孔子の祭典である釈奠の復活に嘉納治五郎ら東京高等師範学校の教師が関与し、当時の師範学校であった大塚において釈奠の儀式が再びはじめられたのであった。そのため筑波大学には林羅山が最初に開いた、上野公園にあった忍岡聖堂以来の狩野山雪筆《歴聖大儒像》も伝来し、二一幅ある肖像は筑波大学に宋儒六幅、東京国立博物館に他の一五幅が所蔵されている。とくに宋儒の六幅は釈奠の際に掛けられるものであった。

《歴聖大儒像》は紙背に「浅草文庫」印が捺され、文庫が湯島聖堂資料を明治期になって保管したところから、そちらより移動したものであることが伺われる。模本一四面については文庫印はないが、紙背に「東京高等師範学校」印が捺されている。また東京教育大学より移管されながら、図書館の所蔵の記録では記載のない、貴重に受け継がれた屏風絵も林羅山と同時代の狩

野探幽と尚信によって描かれたことが明らかとなり、これら資料が湯島聖堂、あるいは昌平坂学問所旧蔵の可能性も考慮すべき対象となったのである(4)。このような推論から、筑波大学に所蔵される《歴聖大儒像》六幅と《賢聖障子図》一四面は江戸前期湯島聖堂開廟当時の礼拝空間が復元できうるであろうことが想定され、そのため研究の方向は次のような観点から考察、復元を進めるに至ったのである。

- 1、《賢聖障子図》が湯島聖堂の扁額模本であること
- 2、《賢聖障子図》の失われた二面の復元
- 3、礼拝空間の正殿に安置される孔子像(立体像)に関する考察
- 4、その考察の成果としての孔子像の立体的な復元
- 5、礼拝空間に掛けられた《歴聖大儒像》と積奠について
- 6、礼拝空間を想定したCGによる復元

これらの研究の方向とその可能性は次第に蓄積していった研究成果とともに確認され、結果として上記研究の横断的な考察が可能となったものである。とくに《歴聖大儒像》については江戸初期の制作としてはきわめて保存がよく、前述したように本図が常設されたものではなく、おそらくは積奠の際だけに掛けられたものであることが間違いないものとし、その推論から考察を加えていった。

### 三、研究の成果

本研究は研究資料の存在と、その研究資料の持つ背景、それらを総合し江戸前期の湯島聖堂を復元できる可能性を見出したことであり、それを大きな研究上の仮説としたことである。複合的な推論の上に成り立ち、研究的な手

堅さを要求する研究者からは研究計画の脆弱さを指摘されても致し方ないところであるが、本研究の性格上、理論と制作を統合し、統一的な手法で横断的、学際的な研究の可能性を開くことを考えるならば、資料の持つ有機的な関係を結びつけ仮説とすることはあつてよいことではないかと考える。

本研究では当初から日本画の復元研究者として藤田志朗氏(筑波大学人間総合科学研究科教授)を協同研究者に迎え、資料とその復元の過程でさまざまな発見もでき、美術史における様式論的な解釈では補えない新たな研究成果も見出すことができたのである。

研究方法は調査研究と復元による多面的な角度からすすめ考察した。二項の「研究の目的と方法」で示したように、美術史的な考察では①筑波大学本《賢聖障子図》、②湯島聖堂安置の孔子像、③積奠についての三つの観点から考察し、また制作的な観点では、復元の対象は、《賢聖障子図》の失われた二面と湯島聖堂の孔子像であつた。

研究を進める過程で顕著な調査成果を得た事例として、東京国立博物館所蔵の狩野常信筆《賢哲図像》二巻の調査が特筆でき、《賢哲図像》の調査によって、筑波大学の《賢聖障子図》が扁額の模本である確証と復元の可能性を示したといつてよいであろう。特に巻末には《歴聖大儒像》の幅背に捺されている「浅草文庫」印が見られ、《賢哲図像》が湯島聖堂の旧蔵にかかる資料であつたことが認められ、これにより失われた儒者の肖像の特徴が明らかとなつていった。

さらに正殿安置の孔子像については徳川義直との関係から名古屋城の孔子像との関係が予測され、湯島聖堂に残された写真図版と同様の手と見られ、七条仏所の仏師康首作であることが明らかとなった(5)。このことにより、江戸時代の元禄以降に各地に聖堂が建てられ安置された孔子像の様式と比較

を行うこととなった。

本研究は美術史と日本画ならびに彫刻の復元による調査研究さらに制作と横断的な研究を相互に行うものであったが、それにより失われた画像の想像的ではあるが復元が可能となったことである。またこのことは美術上の学際研究が果たす役割の方向性を一方で示す意味で試行的な観がある。しかし、美術史を例に挙げるならば、斯学を中心とする共同研究、新しい研究視点という意義を示してくれたものと考ええる。

また、美術上の復元がなした意味を考え、たとえばその一例を孔子の彫刻像に求めるならば、胡坐による木彫像は中国的な気分を示す閑谷学校や多久聖廟の孔子像に比較して、日本的な表現をとっており、それを表象の歴史資料としてどう解釈すべきか、日本的な儒教政策を視野に学際的な研究が望まれるところと考える。

## 注

- (1) 『昌平志 卷第一 廟図誌』。
- (2) 『昌平志 卷第一 廟図誌』、及び『昌平志 卷第二 事実誌』。
- (3) 積奠の準備に際し「六從祀画幅、殿内江掛候事、楽器者東廻廊東南隅の柱より三本目之柱を目当て二いたし・・・。」『積奠』（寛政十二年仲秋積奠記）とあることによる。
- (4) 拙稿「歴聖大儒像と探幽・尚信の新出屏風について」『筑波大学附属図書館所蔵日本美術の名品―石山寺一切経、狩野探幽・尚信の新出屏風と歴聖大儒像―』筑波大学附属図書館 二〇〇〇年五月。
- (5) 三山進「近世七条仏所の幕府御用をめぐる―新出資料を中心に―」『鎌倉第八十号』鎌倉文化研究会 一九九六年一月 一―四四頁。